

学校の実態を国政の場に！！



水岡 俊一さん（きょうと教組書記局で）

2019年7月に行われる参議院議員選挙の比例代表の日政連議員候補予定者に決まった水岡俊一さんに書記局がお話を伺いました。（4ページ参照）

中学校現場、兵庫県教職員組合での活動を経て2004年から12年間参議院議員として活動を続けてこられた水岡さんに、政治、学校教育に対する思いや考え、抱負を語っていただきました。

【日政連議員としての重要な仕事は・・・】

日政連(日本民主教育政治連盟)議員の仕事は、教育にかかわる法律、平和人権にかかわる制度といったものを作ることであるのは間違いないのですが、ある意味でもっと重要なことがあります。それは、学校現場の実態を国政の場にきちんと伝え、理解してもらうことにあります。国会議員の多くが、いわゆる「エリート街道」を歩んできた人達なのです。その国会議員に公立の学校の話をして、知らないことや理解してもらえないことが多いのです。

例えば、クラスの子どもたち一人ひとりが、それぞれの顔をもって、家庭の悩み、友達のことなどを自分の中に抱えながら学校に来ています。その中で様々な問題、時には事故が起こったりします。現場の教職員はその対応、解決に向けて多くの時間をかけ苦労している・・・。「学校」の仕事の中で、授業で教えること以外にそういったことが大きな比重を占めています。このような現場の実態を国会議員が理解すること抜きに、いい制度やいい法律はできません。日政連議員の重要な仕事の一つは、公立学校を取り巻く環境や現場実態をほかの国会議員に伝え、理解してもらうことだと思ふのです。

もっと言えば、文部科学省の官僚にも同じことが言えます。彼らの多くが有名進学校出身者であり、押しなべて高学歴です。ここでも学校における悩みや課題が正しく理解できていない

と言っても過言ではないのです。学校にも働き方改革の風が吹き始め、教育の問題もクローズアップされている今、日政連議員がその活動をさらに進めて、永田町(国会)と霞ヶ関(省庁)で公立学校の実態を正しく理解し議論できるようにすることが求められています。

【学校にも吹いてきた働き方改革の風】

教職員の超過勤務の実態を何とかしなくてはならないという議論が高まってきました。そのきっかけの一つは、2年前の通常国会が挙げられます。参議院の文教科学委員会において、那谷屋(現参議院議員)さんや私たち日政連議員は「学校の超勤実態をどう考えるのか」と馳文部科学大臣に質問をしました。更に、「管理職が職員の出退勤を把握していない、記録していない、保存していないのは、労働基準法違反ではないか」「これについては罰則があるが、だれかが告発したら大臣どうしますか」と、実際の勤務実態の問題を法律に照らして追求したのです。これに対し馳大臣は「まさに七首を突きつけられている気がする」と真剣な答弁をし、このことが中教審の動きや文部科学省の通知などいろいろな新たな動きにつながりました。

一方で日教組はかねてよりこの問題に取り組んでいたことを忘れてはなりません。日教組が連合総研に委託した日本における教職員の働き方・労働時間の実態に関する研究結果を文部科学省に示すことができたからこそ、馳大臣の真剣な答弁を引き出すことができました。まず組合の動きがあり、二次的なものとして日政連議員の動きがあり、現在の動きにつながったと思っています。

今後、交渉の中でも問題点を整理しながら、法律的な観点で議論を進めていくことが現場の「働き方改革」につながるのではないのでしょうか。

【給特法は「高度プロフェッショナル制度」(残業代ゼロ法案)】

教員は給特法により給料月額額の4%の教職調整額が支払われており、残業代は支払われません。これはまさに、「高度プロフェッショナル制度」そのものです。今話題になっている「高プロ制度」を例に話をすると、組合員に給特法の問題について理解してもらいやすいと思います。「この制度はとんでもない超勤実態を生み出すことにつながる。今の学校現場のように。しかも違法ではない。」このことを教員自身が認識することはもちろん必要ですし、保護者、社会にも理解を広げることが大切です。

【学校は子どもたちが自分の考えを持てるようになるところ】

「学校」の持つ意義・・・教えられること、伝えられることを覚えて身につけるのが「学校」だと思われがちです。でも、子どもたちが先生から教えられたことや伝えられたことを一旦は受けとめながら、それに対する自分の考えをちゃんと持つことができるように育むのが、学校に求められていることではないのでしょうか。「これ、おかしくない?」「わたしは、嫌だな。」「なんでこうなるの?」「これ、いいね」といったことを学校の中で大切にしていけるべきです。

先日、ある番組で国仲瞬さんの話を聞きました。国仲さんは沖縄を訪れる修学旅行生向けに

